サンザルナ

ナナフシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サンザルナ

【Ｎコード】
Ｎ５７２２Ｔ

【作者名】
ナナフシ

【あらすじ】
２６３０年突如現れた闇の世界から来た者達と戦う主人公の物語である

プロローグ

「皆、配置に着いたか？」
「着いたよ」
「よし、かかれ」
「了解」
俺の名前は櫻木・Ｓ・サンスター。
まぁこれはコードネームだけど。
今は２６３０年。
１０年前、突如現れた闇の世界から来た者達によって人類は破滅の一歩を辿っていた。
そして街や村は安全地区と危険地区に分けられた。
安全地区には俺達人が住んでおり、危険地区には闇の世界から来た者達住んでいる。
そして闇の世界から来た者達は俺達人類を滅ぼすために安全地区をどんどん破壊していった。
そしてたくさんの犠牲を払い俺達人類は８年前に戦う決心をした。
そして街や村には軍事基地を作り、やって来た闇から街や村守り、ミッションで闇を倒しに行ったりするようになった。
そして俺が所属する軍の名前はサンシャインセルビスと言う。
俺はそのサンシャインセルビスの属性能力を持つ部隊、第６属性部隊の隊長だが俺はその属性能力を持っていないのになぜか支部長に言われて、俺は第６属性部隊の隊長になった。
なぜこうなったかは教えてくれない。
あくまでも俺の予想だが、支部長は脳天気だから適当に入れたんだと思う。
そして今、俺達はミッションランクＣのデビルバグの駆除をやっている。
ミッションには難易度がある。

ミッション難易度はF～Sランクまである。
そして今俺達が戦っているデビルバグというのは虫の姿をした闇である。
闇の姿はデビルバグを入れて４つある。
１つはダークビーストという獣の姿をした奴がいる。
もう１つは悪魔魚という魚の姿をした奴がいる。
そして最後の１つは人の姿をした奴がいる。
人型は俺達と同じ様に１人１人に名前があるらしい。
人型以外の闇は大・中・小とまとめられている。
「よし、これで任務完了」
「やったね。お兄ちゃん」
こいつは俺の弟のコードネーム櫻木・Ｓ・マーチュルス。
年齢は１４歳で体格は小太り。
こいつの能力は水を司っている。
「今日も大変だったねー」
こいつは幼なじみのコードネームナナ・Ｈ・ウラウス。
年齢は俺と同じ１６歳で結構美人だ。
４歳の頃から一緒によく遊んでいた。
こいつの能力は光を司っている。
「イヤーそれにしても大きかったねあの・・・・・・なんだっけ？」
こいつは仲間のコードネームシクセス・Ｄ・サターン。
年齢は１８歳だ。
こいつの性格は天然ボケだがこいつが怒ったら結構怖い。
こいつの能力は土を司っている。
「・・・・・・デビルバグですよ・・・・・」
こいつは先月この部隊に入ったコードネームライト・Ｆ・ビーナス。
こいつはこの明るいコードネームとは裏腹に冷静沈着で腹黒いと言うことだ。
こいつの能力は金属を司っている。
そして俺はいつも思う。

弟や幼なじみには能力があるのになぜ俺はないんだろうと。
だけど今俺の２つの能力が目覚める。

プロローグ（後書き）

感想をぜひください

目覚める能力

俺達第６属性部隊は、今メイン広場にいた。
「しばらくミッションなくて暇だな」
俺はそう言ったがやっぱり平和が１番！
「・・・・・・確かに暇・・・」
思えばライトが何かやっているところを見たことがない。
「ねぇ～ライトちゃん何か趣味はないの？」
俺が聞こうとしたことをナナが先に聞いた。
「・・・・・・読書」
「それだったら、本読めばいいじゃん」
「・・・・・・持っている全部読んだ・・・」
「そうかー、ナナ本持ってねぇか」
「持ってないわよ」
ピンポンパンポーン。
「第６属性部隊の皆さん支部長がお呼びです。
至急、受付広場に来てください。
もう１度繰り返します」
「あ、呼び出しだ。
行くぞ皆」
「了解」
俺達は呼び出されて、受付広場で３０分待った。
「やー、来てるね諸君」
「支部長呼び出した本人が来るのが遅いです」
「で、君達に頼みたいミッションがある。
ランクはＢランクだ」
あっさりスルーされちまった。
「で、そのミッション内容は？」
「うむ、デビルと言う奴を倒してきてくれ」

「名前からして、今回の闇は人型ですよね」
ナナの言う通りだ。
まず名前からして人型に違いない。
「うむ、少し辛いが引き受けてくれるよね」
「了解」
本当は行きたくないけど、引き受けないとこれがず～と続くからな～。
そして俺達は目的地に着いた。
「よし、ミッションスタートだ」
今俺達がいる所は壊れた城だ。
「よし、分かれて探すぞ」
「了解」
「まずはここからだ」
ガチャッ
中は見るところ個室のようだ。
「ここにはいないか・・・・・ん？」
俺は誰かに見られてる気がして辺りを捜索したが何もいなかった。
「気のせいか」
そして捜索して２０分経った。
「最後はここか」
「おーい、サンスター」
「ナナ、マーチュルス。
どうだった？」
「いなかった」
「こっちも」
「おーい」
後ろから声が聞こえた。
「シクセス、ライト。
そっちは？」
「こっちにはいなかった」

「こっちも・・・・・」
「つまり、ここにいるのか」
ガチャッ
開けて先を見ると、目標がいた。
「ふふふ、待ってたよ」
「俺達に気づいていたのか？」
「ああ、入ってくる前から気づいていたよ」
「それじゃー、やっぱりお前がデビルか」
「ああ、言っておくが俺は人型の中で1番弱い」
「1番弱い？簡単に倒せるかもね、お兄ちゃん」
「いや、あいつは人型の中でだ。
気を抜くなよ」
「わかった」
「さて、行くよ」
「ナナ、マーチュルス援護を頼む」
「了解」
俺は右手に剣を持ち、左手にナイフを持った。
「行くぞ、シクセス、ライト」
「おう」
「今、武器を作ってるから待って・・・・・」
ライトはハンドガン以外は砂鉄や金属で武器を作って戦っている。
「サンスター、俺が先行する」
「わかった」
シクセスは双剣使いだ。
シクセスはだから格闘にたけている。
「はぁー」
シクセスの攻撃を簡単に避けた。
「今だ」
「ここだー」
当たると思ったが簡単に避けられそして背中に蹴りを入れられた。

「がはっ」
その時バババンという音が聞こえた。
「ふん、あたらねぇよ」
「メタルランスレイン・・・・」
「何」
ライトの手のひらから複数の槍がデビル目掛けて飛んでいった。
「あなどった、貴様ら属性能力者か」
「よし、攻撃方法を変える」
ナイフをしまい、ハンドガンを取りだした。
「行くぜ」
俺はデビル目掛けて剣を振り下ろした。
予想通りデビルは避けた。
「ここだ」
デビルに銃口を向け、2発撃ち込んだ。
その内、1発が命中した。
「ぐあ、やるな。
　これでもくらえ、アイスランスレイン」
「ちっ、防ぎきれない」
飛んできた複数の槍は防いだが、数本はかすった。
その時銃からバキッという音が聞こえた。
銃を見るとランスが刺さっていた。
「くそ」
「もう、君は銃がないね」
「いや、ある」
俺は懐から銃を取り出した。
「その銃はサンシャインリボルバー！」
「へぇー、この銃そう言う名前なんだ」
「なぜ、貴様が持っている」
「教える気はない」
「そうか、それじゃー、死ねー」

攻撃をなんとか受け止めたが、デビルは口をがぱっと開け、そこに氷の弾が作られていた。
銃で撃ち抜こうと思ったが手を捕まれていて構えられない。
剣は攻撃を受け止めていて、動かせない。
「くそ、あの人を見つけるまで死んでたまるかー」
その時、サンシャインリボルバーが光り、剣が炎を纏った。
「き、貴様その右目は、闇を滅ぼす力サンシャインアイ！」

目覚める能力（後書き）

後は次回に続きます

伝説の能力

「うおー」
「ち、何故貴様がその目を？」
「サンスター！」
すごい体から力が溢れる。
「おい、サンスターが持ってる剣を見てみろ」
「え・・・・」
皆は俺の持ってる剣を見て黙り込んだ。
「ほ、炎って、確かサンスターは能力がなかったはずよ」
「もしかしたら、あの銃が目覚めさせたんだろう。
いや、驚く所はもう１つある。」
「うん、だって炎の能力を使えたのは伝説の戦士オデッセイだけなのよ」
「ふん、少しは楽しめそうだな」
「てめーに楽しむ時間なんてあたえねーよ」
「調子に乗りやがって」
俺はデビルの後ろに回り込んだ。
「な・・・」
そして蹴りを入れた。
「がはっ」
「くらえ」
炎を纏った剣で思いっきり斬りかかった。
「がはっ、左腕がー」
「フレイムランスレイン」
俺の手のひらから複数の炎の槍が飛んでいった。
「くそ、アイスシールド」
デビルの目の前に氷の盾が現れた。
だが、アイスシールドにひびが入った。

「何」
アイスシールドは壊れ数本がデビルに命中した。
「がはっ、くそー、アイスランスレイン」
デビルの手のひらから複数の氷の槍が飛んできた。
「フレイムシールド」
俺の目の前に炎の盾が現れた。
「ふん、そんな物」
アイスランスレインに続いてデビルも氷を纏って体当たりしてきた。
「何！」
フレイムシールドに当たったアイスランスレインがどんどん溶けてっている。
そして、デビルはフレイムシールドに体当たりをした。
デビルの纏っていた、氷がみるみる溶けてデビルが叫んだ。
「ぐあーーーー」
よく見るとデビルの体に炎が燃え移っていた。
どうやら、フレイムシールドに触れた者は炎が燃え移るらしい。
「あ、熱いーーー」
「これで終わりだ、フレイムショット」
銃から炎の弾が飛んでいった。
そして弾は頭を貫いた。
「がはっ」
デビルは燃えて消えてしまった。
「サンスター」
「皆」
「やったな」
「お兄ちゃんが伝説の戦士と同じ属性能力なんてすごーい」
「・・・・・すごかった」
「皆、ありがとう」
そして、俺達は基地に戻りミッション完了の報告をした。
「ご苦労様」

「あの、支部長」
「なんだい」
「俺に属性能力が眠っていると知ってたんですか？」
「さぁ、どうかな」
「そうですか、失礼しました」
「オデッセイ、君の言った通り彼には伝説の目があるらしい。
もう１つは目覚めてないがな、いや、もう１つの目は目覚めない方がいいかもしれない。
なんせもう１つは・・・・」
そして、部屋に帰った俺は深い眠りについた。

伝説の能力（後書き）

デビル篇終わったー

もう1つの能力

デビルとの戦いから3週間経った事だった。
「だいぶ能力を扱える様になったね、サンスター」
「ああ、だがまだまだだ」
俺はそう言うとサンシャインアイから普通の目に戻した。
「そうかなー、私達以上に使いこなしてるけど」
ピンポンパンポーン
「第6属性部隊隊長の櫻木・S・サンスターさん。
支部長がお呼びです、至急、支部長室に来てください。
もう1度繰り返します」
「お、呼び出しだ、ちょっくら行ってくるわ」
「うん」
俺は支部長室に向かった。
トントン。
「入りたまえ」
「失礼します、支部長何か用でしょうか？」
「うむ、前君達が倒したデビルの事を覚えているかい？」
「ええ、まあ」
「そこでなんだが、人型のデビルを倒したのを見込んでの頼みなんだが」
「なんでしょう？」
嫌な予感しかしねー。
「こいつを倒して来てほしいんだ」
「え～と、サターン・クロノスの討伐・・・・・って、これもしかして」
「うん、人型だよ」
またかー。
「俺達じゃないとだめなんですか？」

「うん」
「わかりました」
「それじゃー行ってきてくれ」
「了解」
俺は大きいため息を吐いて部屋を出た。
「第６属性部隊全員集合」
「どうしたの？」
「今日のミッションだ」
「どんな、ミッションだ」
「サターン・クロノスの討伐」
「え、お兄ちゃんもしかして」
「ああ、人型だ」
「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」
しばらく沈黙が続いた。
「よし、死ぬ覚悟で行こう」
「まだ、死にたくないわよー」
そして、俺達は目的地に着いた。
場所は廃墟となった街だ。
「こう、広いとなー・・・・・ん」
俺は視線を感じ、視線がする方にサンシャインリボルバーを向け、
撃ち込んだ。
「ふん、気づいていたか」
「貴様がサターン・クロノスか？」
「ああ、そうだよ、言っとくけど、僕はデビルの様にはいかない」
「そうだろうな」
「行け、ダークビーストよ」
いろんな所からダークビーストが現れた。
「こ、こんなに！」
数はたぶん１５０匹近くいるだろう。

「俺がサターンをやる。
お前達はダークビーストを頼む」
「了解」
そう言うと俺はサンシャインアイを出した。
「ほおー、それがサンシャインアイか」
「行くぞ、フレイムランスレイン」
俺の手のひらから複数の炎の槍が飛んでいった。
「ふん、ダークランスレイン」
サターンの手のひらから複数の黒い槍が飛んでいった。
そして、2つはぶつかり合い爆発を起こした。
「今だ」
俺は剣を抜いた。
「フレイムソード」
剣が炎を纏った。
「うぉー」
俺は剣を思いっきり剣を振り下ろした。
簡単に避けられてしまった。
「そんなものなのか」
「後ろだ」
「なに」
俺はパンチを思いっきり入れた。
「ごふ」
サターンは近くの建物に直撃した。
「やるなー、本気を出させてもらう」
あれは本気じゃなかったのか。
「何をぼ〜としている僕は後ろにいるよ」
「な・・・・」
俺は重いパンチを入れられた。
「がはっ」
俺はビルを貫通し、地面に倒れ込んだ。

「ごふ」
血？ああ、俺の血か。
だめだ、意識が薄れてゆく。
ここまでか。
俺は意識がなくなった。
「ん、サンスターが！」
「さらばだ、太陽の目よ」
「サンスター」
その時、俺の周りに雷が現れた。
俺はその時、何かに飲み込まれるのを感じた。
そして、俺は立ち上がった。
だが、そこから俺は飲み込まれてしまった。
「貴様その目も持っていたのか、闇の力ムーンアイ！」

もう１つの能力（後書き）

やっと出たームーンアイ
後は続きます

雷の能力

サンシャインリボルバーは紋章が太陽から月に変わり、金色から銀色に変わった。
「ほう、これが私を宿す者の体か」
「ちっ、死ねー」
闇を纏ったパンチか。
「ふん、サンダーシールド」
「な・・・ぐぎゃー」
ふん、感電したか。
「な、何だ」
「私のシールドに触れた者は感電して、しばらく動けなくなるのでな」
「な・・・・」
「その間いたぶってやる」
「た、助けて」
「サンダーソード」
剣が雷を纏った。
「ふん」
ザシュッ
「ぐぎゃー、右腕がー」
「サンダーランスレイン」
久々に飛ばしてみたが前より少ないな。
「がはっ」
「もう、飽きた」
「がはっ」
「さらばだ、サンダーショット」
「ぐぎゃー」
サターンは跡形もなく消えた。

「ふん、つまらん、あそこにいる奴も殺すか」
「何？」
「サンダーランスレイン」
ダークビーストは全滅したか。
「ん・・・人間か」
「サンスター、助かったわ」
「待って、ナナさん」
「どうしたの、マーチュルス君」
「おかしいと思いませんか」
「どこが」
「だって、お兄ちゃんが使えたのは炎ですよ」
「あ・・・・」
「ああ、確かにマーチュルスの言う通りだ」
「それに、雷を使えた人なんていませんよ」
「あなた誰？」
「私か、私に名はない」
「何だって」
「そうだな、それではムーンアイだ」
「ムーンアイ！」
「そうだ、私はこいつの左目に宿る者だ」
「サンシャインアイの他にあったなんて」
「・・・・・・・サンスターはどうなってるの・・・・・・」
「ああ、こいつなら気絶しているだけだ、時期目を覚ましたら元に戻る」
「そう」
「だが、その間楽しませてもらおうか」
「な・・・」
「くらえ、サンダーラン・・・・う」
何て回復力だ。
先代を超えている。

「くそ、お前達運がよかったな」
「え・・・」
「奴の意識が回復する、今度会った日は命がないと思え」
「く・・・」
「さらばだ」
そして、自称ムーンリボルバーからサンシャインリボルバーに戻った。
「う・・・ん、俺は一体・・・痛っ」
「大丈夫、ミッションは終わったわ」
「そうか」
そして、俺は気絶した後に何があったのかを聞いたのだが誰も答えてくれなかった。
俺はあの時感じた感覚を忘れることができなかった。
あれは何だったのだろう？

雷の能力（後書き）

いやー、ムーンアイも出てきたし、ここから更に本格的になります

真実

また、俺達6属性部隊は支部長に呼び出されていた。
「よく来てくれたね今回のミッションにつ・・・」
「人型は勘弁すよ」
「・・・・・・つ」
「だから、勘弁すよ」
「サターンを倒してきてくれるよね」
「前倒したじゃん」
「別の奴だよ」
「わかりました、行きますよ」
「うむ」
そして目的地に着いた。
どうやら、廃墟したビルの様だ。
「何でまたなんだよ」
「しょうがないでしょサンスター唯一人型を多く倒したのは私たちなんだから」
「だからって」
「おい、二人とも、ダークビーストとデビルなんだっけ？」
「・・・・・・デビルバグ来た」
「よし、かかれ」
「了解」
俺はサンシャインアイを発動させ、左手にサンシャインリボルバー、右手に剣を持った。
「フレイムソード」
剣が炎を纏った。
「フレイムランスレイン」
俺の手のひらから複数の炎の槍が飛んでいった。
前より数は増えている。

そして、ダークビーストとデビルバグを倒していた
後ろから拍手が聞こえた。
振り返るとデビルがいた。
「お前達は残りの奴らを」
「了解」
「さすが、太陽の眼と月の眼を持つ者だ」
「月の眼？」
「なにも覚えてないのかい」
「何のことだ」
「まぁ、いい、戦いながら話そうよ」
「てめぇと話す気はねー」
俺は炎を纏った剣フレイムソードを振り下ろした。
「アイスシールド」
サターンの前に氷の盾が現れた。
「こんな物ー」
俺はサンシャインリボルバーをしまい腰からナイフを取り出した。
「フレイムタガー」
ナイフは炎を纏った、刃の長さも通常より少し長めだった。
「うおー」
俺はフレイムタガーをたたきこんだ。
「ふん、真実を教えてやろう、貴様が気絶した後に何があったか」
「何」
「貴様はサンシャインアイの他にもう一つ伝説の眼を持っている」
「なんだよ」
「闇の眼ムーンアイをな」
「なに！」
「つまり、それで闇達を一掃したんだよ。
その後仲間も殺そうとした」
「なに」
「つまり、お前は仲間殺しになるところだったんだよ、あはははは

は」
サターンの笑い声が響く。
「黙れ、黙れ黙れ黙れ黙れー」
炎がすごく燃え上がった。
「融合」
剣とナイフが混じり合い炎を纏った大剣になった。
「な・・・・そんなこと先代の奴にはそんな能力なかったはず、貴様一体」

真実（後書き）

何か、シクセスの天然ボケがなかなか書けない
感想待ってます

自分への怒り

「フレイムビッグソード」
俺はそう言った後はっとした。
「こ、これは」
「大剣か、だが動きはとろくなるそれで私に勝てるとでも思っているのか」
「いける」
俺は思いっきり地面を蹴った。
「俺は後ろだ」
「は、速い」
俺は大剣を思いっきり振り下ろした。
「くそ」
サターンは地面を転がった。
「やるなー」
「何処を見ている」
俺はサターンの足下にいた。
「はっ」
俺はアッパーを決めた。
「つっ」
そしてサターンは上に飛んだ。
「次はこっちだ」
俺は大剣を振り下ろした。
「がはっ」
サターンは地面に思いっきりぶつかった。
「これで終わりか」
「くそ、アイスランスレイン」
サターンの手のひらから複数の氷の槍が飛んできた。
「フレイムランスレイン」

俺の手のひらから複数の炎の槍が飛んでいった。
そしてぶつかり合い爆発を起こした。
「はぁー」
「うぉー」
俺はサターンの攻撃を避け、大剣で真っ二つに斬った。
「ぎゃーーーー」
サターンは跡形もなく消えた。
「皆！」
俺は皆の所に向かった。
「融合解除」
大剣から剣とナイフに戻った。
「はぁー」
俺は皆と協力し、デビルバグとダークビーストを倒した。
「はぁはぁ、何で気絶している時のを言わなかったんだ、お前ら」
「ごめん」
「サンスターを傷つけたくなかったの」
「ナナ・・・・」
「本当にごめん」
「俺達からも謝るすまなかった」
「ああ、今度から皆を傷つけないために俺には1つ提案があるんだ」
「何だ」
「ムーンアイをコントロールする」
「え・・・」
「できるのか」
「わからない、でもこれしかない」
「わかった」
「さあ、皆帰ろう」
「うん」
そして、俺達は基地に戻った。
「支部長、話があります」

「何かね」
「支部長は俺にサンシャインアイとムーンアイがあることをしってたんですね」
「ああ、隠していて悪い」
「それで1つ提案があります」
「何かね」
「ムーンアイをコントロールはできないのでしょうか」
「うむ、できるとオデッセイから聞いている」
「オデッセイ？」
「君と君の弟を助けた人だよ」
「え・・・・」
「オデッセイは君の眼に気づいていたんだ」
「それで支部長も」
「そう言うことだ」
「あの人が」
「サンスター、明日から特訓だ」
「はい」
俺は部屋を出た。
「オデッセイは今何処にいるんだろう？」
俺は疑問を持ったまま皆と集まった。
「思えばなんでサンスターがサンシャインリボルバーを持ってるの？」
「思えばあの日お前は俺達より先に避難したから知らないか、それじゃー話すよ」

自分への怒り（後書き）

次回はサンスターの過去を書きたいと思います。
感想待ってます

サンスターの過去

「まぁ、仲間でも本名を知ってはいけないから、コードネームでな」
「うん」
「そう言えば兄ちゃん俺もナナさんと避難してたから・・・」
「そうだったな、それじゃー話すぞ」

今から六年前の話だ。
俺達三人はいつもの様に遊んでいた。
そして、遊び終え、家に帰って、ご飯を食べてる時に奴らは来た。
俺達家族は急いで避難場所にあるトラックへ向かった。
だが人数オーバーだったのでマーチュルスだけを逃がすことにした。
そのトラックにはナナも居た。
ナナにマーチュルスの事を頼み、俺と父さんと母さんは残った。
その時だった、後ろから闇がやって来て、どんどん残った人達を殺していた。
俺はその時恐怖に襲われ動く事ができなかった。
そして闇は俺の目の前で両親を殺した。
その時更に恐怖に襲われ、苦しく、悲しかった。
そして次は俺が闇に殺されそうになったとき、オデッセイが助けてくれた。
オデッセイは俺を見て、俺の名前を聞き、このサンシャインリボルバーを渡してくれた。
そして、俺はその後すぐに来た軍の人によって保護され、ナナ達が居るところに送られたんだ。
俺はその後決心した。

あの人の様になりたいと思いここに入った。
「まぁ、わかったかな」
「そんなことがあったんだ」
「ああ」
「で、オデッセイとはそれ以来あっているのか？」
「いや、俺を助けた後行方不明になった」
「そうか」
「でも、俺はどこかに居る事を信じてる」
「ああ、そうかもしれないな」
「おう」
ピンポンパンポーン
「第６属性部隊隊長サンスター、支部長がお呼びです。
支部長室まで来てください。
もう１度繰り返します」
「お・・・とうとう来たか。
じゃ、行ってくる」
「頑張ってね」
「おう」
俺は支部長室に入った。
「失礼します」
「やぁ、サンスター今からムーンアイを操るための特訓をするよ」
「どんな」
「体力と精神力を鍛えるんだ」
「了解」
俺の特訓は始まった。

サンスターの過去（後書き）

短めですみません。
感想待ってます

ムーンアイのコントロール

はぁはぁ」
今までの修行はつらかった。
いろいろとやったからな。
「う～ん、そろそろいいかな」
「本当ですか」
「うん、明日にムーンアイのコントロールをしよう」
「はい」
「今日はゆっくり休みたまえ」
「はい」
俺は部屋に戻り、ベッドに入って寝た。
次の日。
俺はある個室に入れられた。
「あの～ここは～」
「うむ、君が暴走したとき様に作った部屋だ」
「そ、そうですか」
「それでは行くよ」
「はい」
俺はある機械に座った。
「電源ＯＮ」
「電源ＯＮ」
「うわぁーーーー」
俺は気を失った。
「ん・・・ここは」
「よう、サンスター」
「お前は」
「そう、ムーンアイだ」
「そう言うことか」

「そう、俺を倒さないかぎりコントロールは不可能」
「やってやらー」
「ただし、能力を使わずに勝つことだ」
「な・・・・」
「ただし、こちらも使わない」
「そうか」
「だが、俺は強いからな」
「来い」
「行くぞ」
激しい殴り合いが始まった。
「うぉー」
俺は思いっきり殴りかかった。
避けられたので蹴りをかました。
「それくらいじゃやられないよ」
そして、殴り合って2時間が経った。
「はぁはぁ」
「や、やるなー、先代よりはましだぜ」
「そ、そりゃどうも」
「だが、まだだー」
「うおー」
また殴り合いが始まった。
「こんのー」
「ぐはっ、それくらいじゃ能力を使わずに中級の闇を倒すのは不可能だぜ」
「まだまだー」
「がはっ、さっきより威力があがってやがる。
そこまでてめぇを強くするのはなんだ」
「それはー」
俺はとどめの殴りに入った。
「何だ」

「思いだー」
俺はとどめをさした。
「がはっ」
ムーンアイは倒れ込んだ。
「この俺が負けるとわな」
「俺の勝ちだ」
「そうだな、持って行け」
「！」
力が湧いてきた。
その後すぐに意識が戻った。
「はぁはぁ」
「お疲れどうだった」
「いけました」
「うむ、なら君にこれを頼んでいいかい」
「何ですか」
「闇の頂点に立つ王を倒して来てほしいんだ」
「人型ですか？」
「人型だ、こいつを倒せば、闇は引いていく」
「・・・・やります」
「そうか、では行ってきてくれ」
「了解」
俺は皆の所に行き、ミッション内容を話した。
「皆わかった」
「うん、そいつを倒せば私たちの勝ちなのね」
「ああ」
「行こうよ」
「よし、行こう」
俺達は戦う準備をして、闇の王が居る所に向かった。

ムーンアイのコントロール（後書き）

いよいよ次回から王との戦いです。
感想待ってます

王との戦い

俺達は目的地に着いた。
「待っていたよ」
「お前が」
「そうだよ、太陽の眼と月の眼を持つサンスター君いやソーラス・スペーリオン君」
「何故俺の本名を」
「ふふそれは秘密さ」
「くそ」
「行くよ」
「何、皆散開して攻撃を行え」
「了解」
「ムーンアイ」
「ほう、月の眼をコントロールしたか」
「行くぞ」
「来るか」
「サンダーランスレイン」
「ふん」
すべて避けられた。
「くらえ」
「サンダーシールド」
王はそれに触れ痺れた。
「やるな」
「まだだ、皆」
「了解」
「サンダー、ロック、メタル、ライト、ウォーターランスレイン」
全方向から属性の槍が飛んで行った。
「どうだ」

「やるなー」
俺は剣を右手に持ち、ナイフを左手に持った。
「サンダーソード、サンダータガー」
剣とナイフが雷を纏った。
「よく見ればこの雷青白いな」
「行くぞ」
「うぉー」
王は俺を避け皆が居る方向へ向かった。
「な・・・・」
「死ねー」
皆は殴り飛ばされた。
「くっ」
「これでとどめだ」
「やめろー」
バンッ
俺はナイフをムーンリボルバーに持ち替えていた。
「小僧」
「こっちだ」
「調子に乗りや勝手ー」
俺は王の攻撃をくらった。
「がはっ」
俺は壁に激突した。
「これで終わりだ」
もっと俺に力があれば・・・・そうだ、一か八か。
「死ねー」
「サンシャインアイ」
右目が光った。
「何」
俺は左目にムーンアイ、右目にサンシャインアイがあるので両目を開眼させた。

「くっ」
「ばかが、そんなことをしたら体力をよけいに使うぞ」
「だけど、それでもやるんだー」
銃が光った。
「フレイムソード、サンダータガー、サンシャイン、ムーンリボルバー融合」
「何」
「サンザルナ」
大剣になり、太陽の紋章と月の紋章が入っていた。

王との戦い（後書き）

次回最終回です
感想待ってます。

終わり

「それが伝説の武器サンザルナ」
「行くぞ」
俺は王の後ろに回り込んだ。
「は、速い」
王を斬り飛ばした。
「やるなー」
「俺は下だ」
「な・・・」
俺は思いっきり王を蹴り上げた。
「がはっ」
「これで終わりだー」
「や、やめろ」
俺は王を真っ二つに斬った。
「ぎゃ～～～～～」
王は消滅した。
俺達は基地に戻った。
王が倒されたのに気づいたのか。
闇達は引いて行った。
俺達の戦いは終わった。
それから1ヶ月後
闇の者達がいなくなり、平和になった世の中。
「平和だなー」
「そうだね」
「サンスター、マーチュルス遊びに行こう」
「おう」
軍はまだ残っている。
また攻めてくる可能性があるので。

俺はサンシャインリボルバーを肌身離さず持っている。
俺達は平和を勝ち取った。

終わり（後書き）

次はサンザルナ2を作ろうと思います。
感想待ってます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5722t/

サンザルナ

2011年10月9日02時04分発行